

構築会
2001
だより 

構築会だより

目次

会長挨拶	3
松尾 純 (A66)	
構築会会則	4
構築会役員一覧.....	6
支部役員一覧	7
専攻だより.....	8
土木工学専攻：松井 繁之	
建築工学専攻：橋 英三郎	
教職員構成	10
名誉教授の先生からのおたより	12
伊藤 富雄 前田 幸雄	
榎崎 正也 榎木 亨	
紙野 桂人 村岡 浩爾	
井上 豊	
特集「福祉のまちづくり」.....	21
辻野 純徳 (A57) 新田 保次 (C73)	
田中 直人 (A73) 山内 芳樹 (C74)	
杜 典英 (C78) 磯崎 弘治 (C80)	
椎名 辰之 (A88) 大野 拓也 (A96)	
名越 聖子 (C98)	
卒業生だより.....	30
50周年：伊藤 俊夫 (A51) 木田 五一郎 (C51)	
40周年：安原 秀 (A61)	
30周年：角 彰 (A71)	
20周年：戸上 拓也 (C81) 寺田 均 (A81)	
10周年：村上 茂之 (C91)	
支部だより.....	38
大阪支部：辰谷 義明 (C80)	
愛知支部：降 籬 達生 (C83)	
東京支部：井 澤 衛 (CM79)	
兵庫支部：本井 敏雄 (C75)	
広島支部：加地 健一 (C71)	
2001年度役員会報告	43
2001年度総会報告	46
事務局だより.....	48
会員動静	51
業界案内	79

期 会 ご 会 挨 拶

構築会会長 松 尾 純 (A66)



構築会会員の皆様におかれましてはますますご清栄のことと存じます。時は絶えることなく続いているとはいえ、世紀の区切りを過ぎそれぞれが新たな気持ちになっている折でもあります。このような時、会長を仰せつかり身の引き締まる思いでございます。

さて、圧倒的サポートでスタートした小泉内閣は、従来進んできた社会、経済の路線を抜本的に見直すとする国民世論のあらわれでもあるとおもいます。私たち土木、建築界に対しても厳しい転換が迫られているところであります。

社会的には、人口減少傾向、少子高齢化の進行、地球環境的制約の増大、経済的には、安定成長への移行、土地神話の崩壊など、成長する社会から成熟する社会への移行期としての変化への対応が求められていると思います。

2001年の行政改革大綱では、行政の組織の抜本改革として道路公団、都市基盤整備公団、住宅金融公庫など従来は考えもしなかった法人まで見直しの対象になっているのをはじめ、政策の評価制度、公益法人への行政の関与のあり方、地方分権、規制の改革など抜本的な取り組みをしようとしています。

私たちが関係する道路など公共施設や住宅など社会資本整備にあたっては、その基本視点のウェイトのおき方を変えることが求められています。建設にあたり地球環境へ配慮すること、民間の資金、事業力を活用すること、バリアフリーなど弱者への配慮等があります。また、街づくりでは、住民が主体的に貴重な町並み・景観を守る・創る観点やNPOなど地域の人が「公」の気持ちで社会資本整備や街づくりに参画することが重要となるものと思われまます。また、このような取り組みにあたっては、この四半世紀は、住宅・社会資本整備の分野では「ストック・メンテナンス」に重点が置かれるものと考えられます。

このような変革の時代に対応するためには、いろいろな立場の人の協働が不可欠であります。この意味から、いまや4千人を擁するこの構築会の会員は社会資本整備などの幅広い分野で活躍しておられますので、この「場」を活用しない手はないと思います。各地域支部や二水会（毎月第二水曜日に堂島の阪大工業クラブで）が活躍しておられますが、この他テーマを決めた集まりなど積極的な活動が期待されます。今までは連絡の手間が大変でしたが、メールや構築会ホームページを活用すれば、これからはスムーズにできるはずです。21世紀に相応しい地球社会を目指して新たな気持ちで街づくりに取り組んでいきましょう。

幹事をはじめ、会員の皆様のご協力をいただいて伝統ある構築会の発展に努めてまいりますのでよろしくお願いたします。

構 築 会 会 則

平成13年5月5日 改正



総 則

- 第1条 この会は構築会という。
- 第2条 この会は会員の親睦を計ることを目的とする。
- 第3条 この会は事務局を大阪大学大学院工学研究科土木工学専攻あるいは建築工学専攻のいずれかに置く。
- 第4条 必要なときは役員会の議決によりこの会の地区支部、職場部会を設けることができる。

会 員

- 第5条 この会の会員は大阪大学工学部構築工学科、土木工学科、建築工学科、地球総合工学科土木工学科目ならびに建築工学科目、大学院工学研究科構築工学専攻、土木工学専攻ならびに建築工学専攻の現旧教官、卒業生、学生および役員会の議決によって入会を認められた者とする。
- 第6条 この会の会員に次の3つの種別を設ける。
- (1) 正会員：卒業生、教官。
 - (2) 特別会員：名誉教授、元教官、非常勤講師、元非常勤講師および役員会の議決によって入会を認められた者。
 - (3) 学生会員：学部学生および上1号に該当しない大学院生。

役 員

- 第7条 この会に会長1名、副会長1名、幹事長1名、監事2名、委員若干名、幹事若干名の役員を置く。
- 会長は本会を代表し会務を総括する。副会長は会長を補佐し職務を代行する。
- 幹事長は会長を補佐し幹事団を総理する。監事はこの会の会計を監査する。
- 委員は会務を評議する。幹事は会務を処理する。
- 第8条 会長および副会長は正会員の中より役員が推薦する。
- 幹事長は土木工学専攻および建築工学専攻の教授、助教授、講師のうちから互選する。
- 委員は各卒業年次から2名ずつ、各支部から1名ずつ互選する。
- 監事は委員のうちから互選する。幹事は土木工学専攻および建築工学専攻の教官から2名ずつ選出し、うち1名は幹事長を兼ねる。
- 第9条 役員任期は1年とする。たゞし再任を妨げない。

東 一 員 好 会 業 勤

役員会・総 会

- 第10条 役員会は会長、副会長、幹事長、委員および幹事によって構成され、年1回これを開く。但し、会長が必要と認めたときは随時これを召集することができる。
- 第11条 会長は必要に応じて総会を開く。

会 計

- 第12条 この会の費用は会費および寄付金その他をあてる。会費の変更は役員会の議決によってこれを定める。
- 第13条 会費は1ケ年、正会員3,000円とする。ただし、他大学を含めた大学院在学中の正会員は半額とする。
- また、卒業45周年を迎えた会員は、会費を滞納していない限り卒業46年日以降の会費を免除する。
- 第14条 この会の会計は監事が監査し、その承認をえて役員会でこれを報告する。

事 業

- 第15条 幹事団は次の各号の事業を行う。
- (1) 会員名簿の刊行と配布。
 - (2) 講演会、見学会などの開催。
 - (3) その他の行事。
- 第16条 会員が叙位、叙勲などの栄に浴した場合、会長より祝電を打つことができる。
- 第17条 会員が弔事の際は、次の各号による。
- (1) 正会員が逝去の場合は会長より弔電を打ち、柩または盛花一對を呈する。
 - (2) 特別会員が逝去の場合は会長より弔電を打ち、柩または盛花一對を呈することができる。
 - (3) 学生会員が逝去の場合は会長より弔電を打つことができる。

会 則 の 変 更

- 第18条 この会の会則の変更は役員会の議決によってこれを定め会員へ報告する。
- 付 則 この会則は平成13年5月5日より実施する。

構 築 会 役 員 一 覧

会 長	松 尾 純 (A66)	
副 会 長	山 村 勝 保 (C66)	
監 事	藤 田 眞 (C84)	板 田 昌 彦 (A84)
幹 事	西 田 修 三 (C教)	多 田 元 英 (A78)
	松 村 暢 彦 (C91)	甲 谷 寿 史 (A90)

学年委員

1950	原 田 修	1976	芦 原 栄 治	鈴木 克彦
1951	木 田 五 一 郎	1977	蓮 輪 賢 治	古 宮 嘉 之
1952	竹 山 喬	1978	後 野 正 雄	吉 村 英 祐
1953	高 野 浩 三	1979	正 田 正 一	有 坂 伸 二
1953*	濱 宏	1980	辰 谷 義 明	多 田 元 英
1954	大 塚 武	1981	戸 上 拓 也	菅 原 正 晴
1955	堤 道 夫	1982	磯 寄 正 哉	山 中 俊 夫
1956	波 田 凱 夫	1983	山 辺 建 二	丁 野 成 人
1957	広 内 徹	1984	藤 田 眞	清 水 直 樹
1958	豊 島 良 三	1985	玉 井 昌 宏	杉 本 正 三
1959	上 根 善 教	1986	山 内 一 浩	桐 野 健 治
1960	小 野 敦	1987	武 藤 和 好	芦 田 智 之
1961	村 上 昇	1988	鍋 島 康 之	椎 名 辰 之
1962	榎 木 通 男	1989	小 野 正 博	川 合 通 裕
1963	松 井 保	1990	星 加 益 朗	中 塚 光 一
1964	濱 田 圭 一 郎	1991	村 上 茂 之	安 井 信 行
1965	島 田 壯 八 郎	1992	小 野 潔	岩 井 潔
1966	富 澤 茂	1993	大 西 弘 志	若 松 達 史
1967	梶 川 靖 治	1994	神 田 忠 士	向 井 裕 貴
1968	谷 口 剛 也	1995	荒 木 進 歩	西 豊 豊
1969	武 内 一 彦	1996	松 本 忠	田 中 聡
1970	阿 部 信 晴	1997	山 内 淳 平	八 木 秀 樹
1971	伊 藤 伸 司	1998	木 村 充	橋 本 武 士
1972	中 木 秀 一	1999	下 村 公 一 朗	寺 前 隆
1973	森 永 勝 登	2000	内 田 美 範	多 田 正 治
1974	青 木 利 博	2001	橋 本 保 則	軸 丸 久 司
1975	秋 山 寿 行		家 倉 泉	

支 部 役 員 一 覧

愛 知 支 部

支 部 長	英 比 勝 正 (C72)
副 支 部 長	安 原 良 一 (C71)
幹 事 長	降 簇 達 生 (C83)

大 阪 支 部

支 部 長	辻 会 征 雄 (C65)
副 支 部 長	河 上 隆 志 (A69)
副 支 部 長	野 口 恵 司 (C71)
幹 事 長	辰 谷 義 明 (C80)

東 京 支 部

支 部 長	柴 田 陽 一 (C66)
副 支 部 長	中 村 康 一 (A71)
幹 事 長	井 澤 圭 衛 (CM79)

兵 庫 支 部

支 部 長	入 江 恂 一 (A62)
副 支 部 長	岸 田 剛 威 (C66)
幹 事 長	本 井 敏 雄 (C75)

広 島 支 部

支 部 長	江 草 拓 拓 (C63)
副 支 部 長	中 山 隆 弘 (C68)
幹 事 長	加 地 健 一 (C71)

土木工学専攻の近況

専攻長 松井 繁之 (C66)

一昨年に2回目の専攻長を済ませましたが、教室内の都合により一年明けての専攻長を引受けることとなりました。すでに、構築会総会、および東京支部や大阪支部でご挨拶を申し上げます。続けての専攻長を引受けるに当たり、持論でありました専攻長と就職担当を分離させることに同意を得まして、平成13年度の就職担当を出口一郎教授に引受けていただきました。出口先生より、8月末現在で公務員を省いてほぼ希望どりの就職斡旋ができたとの報告を得ております。これはひとえに先輩諸氏のお引き立ての賜と存じております。平成14年度は私が担当することになっておりますが、変わらないご支援をお願いいたします。

さて、教室関係でお目出度い話を最初に報告します。今年の5月25日の土木学会総会にて土木工学教室の名誉教授・前田幸雄先生が、土木学会最高の賞であります功績賞を受賞されました。本年は例年になく多くの候補者がおられたようですが、先生が目出度くご受賞されました。前田先生の長年にわたる土木学会での重責と橋梁工学・合成構造工学への貢献、ならびに、IABSE(国際橋梁構造学会)を通じての国際交流に大変顕著なものがあつたと認められたものであります。生憎先生には腰痛の最中であり、授賞式には欠席されましたが、卒業生有志でお祝いをさせていただきました。

教室内の教官の人事には変更がありませんでしたが、稲本三重子事務官が30年を越す大阪大学生活に終止符を打たれました。就任当初は小松先生の秘書をなされていましたが、小松先生のご退官後は図書室の運営にご尽力いただきました。大変長きにわたる教室運営にご協力をいただきましたこと、教室を代表して御礼申し上げる次第です。稲本三重子さんの後任として新庄由香さんが4月中旬から赴任していただいております。図書の仕事とともに教室事務にもご助力をお願いしております。

さて、構築会総会や各種支部総会にてすでにご紹介をいたしておりますが、国立大学も行政改革を迫られており、独立行政法人化することはほぼ間違いがない状態となりました。今、その変革に向けて精力的・積極的に対応すべく検討を行っております。国の方針であるベスト30校に入ることはもちろんですが、世界のベスト10を目指せとの総長の激が飛んでおります。これには研究が基本となりますが、大学の評価はさらに学生への教育と社会貢献も加わります。研究との3本柱で外部評価を受ける必要があります。一方で、学生の質が低下しているとの意見が強く、1年生時の共通教育についての変革も求められております。ここ1,2年はこのような議論で大変厳しい時期であります。卒業生各位にもご意見を賜ることとなると存じます。よろしくご支援をお願いする次第であります。本年は21世紀の最初の年でありましたが、低迷した状態が続いております。来年こそはと期待しております。よい新年をお迎えになられますようお祈り申し上げます。

建築工学専攻の近況

専攻長 橘 英三郎 (A66)

旧建設系4学科が地球総合工学科として約160人を一括募集するようになり、はや3年を過ぎようとしております。2年次からは分属されますが、将来異なる分野で活躍することになるかも知れない仲間と1年間席を共にすることは、それなりに有意義なことだと思います。

私は構築工学科を卒業したおかげで土木にも仲間が大勢おります。卒業以来ほとんど連絡しあうことはありませんでしたが、50才を過ぎた頃から土木の旧友とも出会う機会が増えました。少し異なる文化圏で人生を過ごされてきた旧友との会話は新鮮であり、少し大げさですが、セピア色に褪せかかった私の大脳に、一筆の彩りを与えてもらったような気もしています。若い方には懐古趣味の心境に入ったか、とかたづけられそうですが、言葉では言い表せられない味わいがあります。多分、地球総合工学科を卒業される方には30年ぐらい先にきっと理解してもらえるものと思います。

ところで、建築工学専攻内での動きとしては、井上豊教授が3月に停年退官され大阪大学名誉教授となりました。井上先生は、超高層ビルの曙の頃から、昨今の免震ビル、制震ビルの分野にいたるまで指導的役割を果たされ、現在も引き続き学協会でご活躍されております。又、4月より日本建築総合試験所の副所長に就任され建築物の性能保証などの新たな展開にも取り組んでおられます。

若手の教官では、阪田弘一助手が京都工芸繊維大学の助教授として転出され、岸本一蔵助手および桑原進助手とともに学内講師に昇任されました。また、阪田助手の後任として飯田匡助手が着任されました。

就職活動では、卒業生の方々に色々ご尽力をいただき、8月の時点では約9割の進路が決まっています。特筆すべきは、ハウスメーカーへの内定者が例年になく9人と多いことです。ゼネコンの設計部門の採用人数の激減にともなう影響かと思われれます。また、インターネットにより書類を取り寄せて複数の会社へ応募する学生が増えています。便利ですが、皆に平等に便利なので、結局は倍率が高くなり、就職活動に多大な労力を強いられているのは少し考えものです。

昨今の大学は独立法人化にむけて進みだし、蜂の巣をつついたようになっていきます。これまでに、あまりにも変革の努力を怠ってきたせいかも知れません。

確かに変革すべきところは多いのですが、いくつかの疑問も残っています。それは勝ち残るための「戦略」や「論文数をかせぐか、さもなくば死か」といったアメリカ方式に偏っていることです。欧米を訪れると日本の製品が溢れています。8月にワシントンDCで米国National Science Foundation耐震部門の部長に乗せてもらったのも日本車でした。町の構造物の仕上げも近寄ってみると粗雑で、日本の建設技術を上回っているとはとても思えません。日本の大学に吹き荒れている改革の嵐はひよっとしたら日本の優秀な工業製品や建設技術をつぶすための欧米の長期的な「戦略」かも知れないと、ふと考えたりします。鬱没たるパトスを抱えながらも雀荘に足しげく通っていた悪友が、建設業で立派な業績を残しているのをみるにつけ、今の多感な学生に大きく育ってもらうため我々は何をなすべきかは難しく、悩ましい問題となっています。



土木工学専攻

社会基盤設計学領域

内 線

教 授	松 井 繁 之	※7619
助 授	大 倉 一 郎	※7620
助 手	大 西 弘 志	※7618
技 官	西 山 六 朗	3515
事務補佐員	松 橋 加寿江	※7618

構造工学領域

教 授	西 村 宣 男	※7600
助 手	亀 井 義 典	※7599
助 手	小 野 潔 美	※7598
事務補佐員	楠 木 晴 美	※7600

地盤工学領域

教 授	松 井 保	※7623
助 授	阿 部 信 晴	※7624
学内講師	小 田 和 広	※7626
学内講師	鍋 島 康 之	※7625
事務補佐員	大 森 真由美	※7623

国土開発保全工学領域

教 授	出 口 一 郎	※7614
助 手	荒 木 進 歩	※7615
技 官	一 宮 孝 信	3514

水システム工学領域

教 授	中 辻 啓 二	※7603
助 授	西 田 修 三	※7606
助 手	川 崎 浩 司	3539
教 務 員	中 村 俊 和	※7605

交通システム学領域

教 授	森 康 男	※7608
助 授	新 田 保 次	※7609
講 師	飯 田 克 弘	※7611
助 手	松 村 暢 彦	※7610
事務補佐員	赤 松 節 子	3513

(※はダイヤルイン 06-6879-〇〇〇〇)

建築工学専攻

建築力学領域

内 線

教 授	橋 英三郎	※7631
助 授	馬 場 研 介	※7633
助 手	向 井 洋 一	※7634
事務補佐員	田 中 希 冴	※7634

建築構造計画学領域

教 授	大 野 義 照	※7635
助 授	中 塚 侖 文	※7636
学内講師	岸 本 一 蔵	※7637
助 手	中 川 隆 夫	※7637
事務補佐員	大 野 ゆ み	3526

建築構造システム学領域

助 授	多 田 元 英	※7652
学内講師	榎 原 進	※7653
技 官	松 井 貴 志	※7653

建築・都市計画論領域

教 授	舟 橋 國 男	※7639
助 授	鈴 木 毅	※7641
助 授	木 多 道 宏	※7640
助 手	李 斌 修	※7640
技 官	川 端 修	3528

建築・都市人間工学領域

教 授	柏 原 士 郎	※7647
助 授	吉 村 英 祐	※7648
助 授	横 田 隆 司	※7649
助 手	飯 田 匡	※7649
事務補佐員	高 野 由 希	※7650

建築・都市環境工学領域

助 授	山 中 俊 夫	※7644
助 手	甲 谷 寿 史	※7645
事務補佐員	村 岸 有 佐	※7645

建築・都市形態工学領域

教 授	吉 田 勝 行	※7655
-----	---------	-------

構築22年の思い出（その4）

阪大土木・木土

名誉教授 伊藤 富雄

阪大土木の俊英たち — 今回は、土木コースを卒業後、特に優れた業績を挙げ社会に大きな貢献をした諸君のことを思い出し、その功績をたたえたい。

大学 — 母校阪大の教授になったのは、室田明君(昭25、昨年の本誌参照)、村岡浩爾君(昭34、日本水環境学会功労賞と学術賞を受賞、同学会関西支部長)、森康男君(昭37)、松井保君(昭38、阪大評議員、土木学会と地盤工学会の関西支部長)、西村宣男君(昭40、土木学会田中賞を受賞)、松井繁之君(昭41、土木学会田中賞を受賞)、中辻啓二君(昭44、土木学会論文賞を受賞)の7名である。これらの諸君は、括弧内に特記した業績も含めて教育・研究上多大の功績があり、阪大土木の名を高めている。また、井上勝敬君(昭34)は、大学院の原子核工学専攻を修了ののち溶接工学の研究者となり、阪大接合科学研究所教授に就任、ロボット溶接の権威として著名である。

次に、他大学に転出しその看板教授として多大の貢献をした諸君を卒業年次順に列举すると、大阪工大の岡村宏一君(昭27、土木学会論文賞受賞)、東大医科学研究所の竹中栄一君(昭27)、摂南大学波田凱夫君(昭31、昨年の本誌参照)、神戸大学神田徹君(昭38)、琉球大学の大城武君(昭39修)、名古屋工大の松井寛君(昭39、第2部主事)、名古屋大学岩田好一郎君(昭40)、徳島大学端野道夫君(昭40)、立命館大学小林紘士君(昭40)、長岡技術科学大学の林正君(昭40、土木学会田中賞受賞)、埼玉大学の佐藤邦明君(昭40修)、熊本大学の崎元達郎君(昭42、熊本大学評議員、土木学会田中賞受賞)、広島工大中山隆弘君(昭43、工学部長、土木学会田中賞受賞)、近畿大学江藤剛治君(昭43、土木学会論文賞受賞)、防衛大学校の青山護君(昭44修)と多士済々である。中でも岡村宏一君が昭和48年度に受けた土木学会論文賞は卒業生初の受賞であり、竹中栄一君が医学に転出し、他大学出身者を冷遇する東大で教授に昇進、放射線医学の権威となったことは特筆に値する。

省庁 — 建設省で括弧内に示す地方建設局長級の職に栄進したのは、高野浩二君(昭28、沖縄開発庁沖縄総合事務局次長)、小川裕章君(昭35、技術審議官)、竹本雅俊君(昭41、技術審議官)の3名である。このうち高野君は風土・史跡などにも明るい博識、明敏なまれに見る技術行政官であった。

運輸省では、原田修君(昭25)、古土井光昭君(昭39)、金子俊六君(昭43)の港湾建設局長が光っている。第1回の卒業生の原田君が、わが国初の国家公務員試験に9番という好成绩で合格したとき、思わず彼と手を取り合って喜んだ。この原田君と古土井君は、知力・気力・体力ともに優れた快男子で立派な業績を残し、古土井君が関西国際空港の造成工事に実質上の社長として今なお活躍しているのは心強い。また、木谷勇治君(昭42)は、神戸大の大学院で建築学を専攻したのち航空局畑を進み、局長級の関西国際空港長にまで昇進した。

防衛庁では、前記青山護君のほか、久保善昭君(昭45修)が陸将、第二師団長に栄進した。陸将といえば昔の陸軍中将である。

公団 — 日本道路公団では、恵須川裕昭君(昭31)、小西康夫君(昭36)、小西弘泰君(昭39)、長谷川明機君(昭39)がいずれも建設局長となり、わが国高速道路の建設に大きな足跡を残したが、特に恵須川君が昭和32年に創設2年目の公団に入り、生え抜きとして長年尽力した功労は並大抵ではなかった。

本州四国連絡橋公団では、沖中浩一郎君(昭27)が当初その架橋計画に参画したのち、建設省から

移って第3建設局長となり、しまなみ街道の建設工事で輝かしい業績を挙げた。また、平山純一君(昭43)は瀬戸大橋の管理局長として活躍している。

阪神高速道路公団では、松山巖君(昭28新)、松尾俊雄君(昭38)、孝石欣一君(昭39)の3人が理事に就任しているが、いずれも出資自治体の出身であり、残念ながら生え抜きでは、加藤修吾君(昭38)が理事直前の審議役に昇進しただけである。同君の長年の労苦をたたえたい。

鉄道建設公団は、中井善人君(昭28)、吉田不二夫君(昭30)、柴田陽一君(昭41)が支社長となり、この3人の活躍が光っており、日本下水道事業団では、浜宏君(昭28新)が理事に就任し、大阪市における長年の経験を生かして、全国各都市の下水道の支援と指導に貢献した。

地方自治体 — 大阪府は地元なので、土木部長に栄進したのが松村明君(昭28)、松山巖君(昭29)、孝石欣一君(昭39)の3名、水道部長も永田哲夫君(昭28新)、船橋睦君(昭29)、豊島良三君(昭33)の3名、合計6名もいる。このうち、孝石君は副知事にまで登り詰めて、大阪府の再建に奮闘中であり、松山君は抜群の行政的手腕で知られ、豊島君はさらに水道管理者に昇進した。また、松山君と船橋君は米田元一君(建築、昭28新、建築部長)とともに3部長を阪大で独占し、他大学からそねまれたことを覚えている。さらに、次の括弧内に示す部長級の役職に栄進したのが、山田健二君(昭28新、技監)、西田稔君(昭36、理事)、岡田好彦君(昭38、都市整備局長)、辻征雄君(昭40、技監)、天野暉正君(昭41、理事)の5名である。

大阪府以外の府県では、永井三郎君(昭25、大分県)、中川三郎君(昭27、京都府・愛知県)、柳沢宏君(昭29、石川県・群馬県)が土木部長に就任し、上記の諸君の多年にわたる地方行政上の功績は偉大であった。また、建設省から出向して、星畑国松君(昭36)が岡山県、竹本雅俊君(昭41)が兵庫県の土木部長になっている。

大阪市で局長または局長級に栄進したのは、交通局高速鉄道建設本部長となった竹山喬君(昭27)、広内徹君(昭32)、葛野恒夫君(昭39)、下水道局理事の浜宏君(昭28新)、建設局理事川崎幸夫君(昭37)、建設局長松尾俊雄君(昭38)、建設局理事浜田圭一郎君(昭39)、港湾局長の高原疆次君(昭40)と仙波惇君(昭41)、計画調整局理事春元靖弘君(昭44)と多士済々である。特に竹山君は大戦後の地下鉄工事にいち早く参画して先駆者となり、さらん国内外の地下鉄の指導に当たるなど、その功績は偉大であった。

神戸市では、港湾局長になった松浦勢一君(昭28)と同期で計画局長に栄進した小坂清君が光っている。

私鉄 — 近鉄で役員になったのは、菅真哉君(昭26、常務)、岡裕君(昭28、副社長)、坂本成彦君(昭38、常務)、南海電鉄では芝谷昭君(昭28、専務)、岩本樹雄君(昭32、常務)の諸君で、いずれも新線の建設、連続立体化工事などで立派な業績を挙げた。なお、菅君は当初奈良電鉄に入社し、後にそれが吸収合併されたのに、近鉄でたちまち頭角を現した。菅君の努力と近鉄の人事評価に敬意を表したい。

建設業 — 鹿島建設の滝田裕久君(昭40、取締役)、大林組の木村悌二君(昭33、取締役、大林道路社長)、桑原章次君(昭36、専務)の活躍が光っている。しかし、大手では学閥・閥閥などのこともあって役員になりにくく、この3人の年代になりようやく役員にしてくれたのか、との感が深いので、その直前まで進んだ諸君を探すと、鹿島建設では、重役待遇理事の清水正貴君(昭34)、一級社員の益岡邦夫君(昭39)と山本正明君(昭44)、大林組では大井賢太郎君(昭35、理事)と福田修治君(昭37、理事)が思い出される。

奥村組では、池田功君(昭25、副社長)、藤沢清君(昭31、常務)、堀田洋一君(昭39、取締役)の活躍が際立ち、特に、池田君が始め大林組を受けて落ちたとき、「よし奥村へ行って見返してやれ」と奥村組に頼んだ覚えがあり、抜群の手腕を持つ同君が副社長に登り詰めたことを聞いて、思わず

快哉を叫んだものである。

また、オリエンタル建設の福本善一君(昭29、社長)、佐藤工業の森喬君(昭33、取締役)と杉晟君(昭40、専務)、不動建設の橋本幸久君(昭36、常務)に宗本邦太郎君(昭40、常勤監査役)、住友建設山下英二君(昭40、常務)、熊谷組の山口啓二君(昭42、専務)、大本組の平田忠積君(昭33、取締役)の奮闘振りは目覚ましく、父祖から武智工務所を受け継いだ数内貞男君(昭35)は、社名をジオトップと改め、見違えるように発展させている。

鉄構業 — 東京鉄骨橋梁の姫田茂君(昭31、常務)、駒井鉄工所の播本章一君(昭33、専務)と吉村文達君(昭44、取締役)、日本橋梁では菊池謙三君(昭30、常務)、小野精一君(昭33、常務)、長谷川義起君(昭39、取締役)の3名、酒井鉄工所は竹内修治君(昭40、常務)、横河ブリッジの大森邦雄君(昭43、常務)の諸君がそれぞれ生え抜きの役員に栄進した。さらに、三菱重工など鉄構專業でない大企業で役員に次ぐポストに就任した人を探すと、三菱重工工事の鎌田正雄君(昭37、常務)、江草拓君(昭38、取締役)、山本正雄君(昭39、取締役)、日立造船では榎木通男君(昭37、理事)と植田利夫君(昭40、技師長)、石川島播磨重工の森安宏君(昭39、技監)に思い当たる。上記の諸君はいずれも、わが国橋梁の設計・製作上多大の貢献をしている。

電力 — 電源開発では篠原淑郎君(昭28、特任参事)、篠原朗致君(昭32、建設部長)、松村義章君(昭33、建設部長)、関西電力は畑中俊吉君(昭28、支配人)の諸君がそれぞれ役員一步手前の役職に栄進し、特に篠原淑郎君は国内のみでなく海外の電源開発にも大きな足跡を残し、畑中君は黒部第4ダムの設計・監理をはじめ、原子力・火力の発電所建設についても立派な功績を残した。また、和田明君(昭35修)は電力中央研究所で発電所の温排水に関する著名な研究成果を挙げて、土木学会論文奨励賞に輝いている。

コンサルタント — 生え抜きで役員に昇進したのは、ニュージェックの杉本清君(昭30、常務)と竹村陽一君(昭34、常務)、パシフィックコンサルタンツでは白石哲也君(昭34、取締役)と多賀正義君(昭44、取締役)、建設技術研究所の岡田耕君(昭38、常務)である。これらの諸君が創立後まだ日の浅い各社に入り、長年、国内はもちろん、海外事業の調査・計画・設計・監理に努力し、各社の発展とわが国コンサルタント業の確立のために尽くした功績は大きい。

喜びと感謝と苦しみの此の頃

名誉教授 前田 幸雄

私の専門の土木学会の通常総会が去る5月25日に東京で開催され、平成12年度土木学会の各賞の授与が行われた。その際、私は最高の賞である土木学会功績賞を授与された。誠にこの上ない栄誉であり、同時に喜びである。専門の構造工学の発達に対する国の内外での寄与が認められたものであって、しかも例年にない激戦の中から選ばれた由で、私にとっては全く豫期しないことであった。私を推せんして下さった方々に心から御礼を申し上げたい。ここで言う構造工学の定義については後で詳しく議論することとしたい。

土木工学専攻の松井繁之教授の呼びかけに賛同して、多くのなつかしい同窓の皆さんから御祝いの言葉と共に、募金にも協力していただいたことは之に勝る嬉しさはない。私には子供がいない為もあって、教え子の学生は皆私にとって宝物であると考えていた。その彼らが阪大を卒業して世の中で活躍する成長を果し、又、私の受賞のを知って、その近況を短く述べた便りと共にお祝いの言葉と共に(後述する)お見舞いの言葉を届けられたことは感激の至りでこの上ない感謝の気持で一杯である。

ところで昔から私はギックリ腰になやまされてきたが、入浴を繰り返して、それに市販の貼り薬を患部に貼って解決してきた。昨年頃から重い本を運んだりした後は腰がダルく、又腰が曲がってきた感じを経験してきたが、たいしたことでは無いと考えていた。今年の2月半ば頃から朝ベットから起き上がるのが苦痛となり、近くの市民病院の整形外科で診察を受けたところ、之以上悪化しない為には安静にするように言われたが、病院の入口の階段を踏み外したり、自宅内で杖を使って歩行中にバランスをとるのに失敗してころんだりして病状を悪化させ、屋内でも杖に頼る生活となり、外の歩行などとても無理な状態になった。79才という年であり乍ら、80才以上の方々が壮健で活躍されているのを見るにつけ、全く情けないことになってしまい、お見舞いの方々にも大変失礼をしている有様である。その間、名誉教授の伊藤富雄先生からはお祝いとお見舞いの御連絡をいただきました。又松井繁之教授からは土木同窓の方々のお祝いとお見舞いのメッセージを伝える為に、拙宅迄短時間ではありますがお訪ねいただいた。少しづつではありますが快方に向っておりますので、更に努力して治療に専念してまいるつもりで居ります。

さて、前述の構造工学の定義であるが、その範囲が広く、私の研究を定義するのは容易でない。すばらしい構造物の設計に従事したという経験もなく、本四公団の長大橋の設計については耐風や耐震の立場から世界的な研究をしたというわけではない。関係した委員会の中で委員活動を行ったにすぎない。但し大三島橋のアーチについては理論解析と実験を阪大の仲間と共に実施した。しかし、私が極めて興味をもって研究して大きな業績をあげてきたのは鋼とコンクリートの合成構造の理論的並びに実験的研究であって、ドイツではプレストレスによってコンクリートのひびわれを制御するのに対し、私のはプレストレスしない方法であって、国際会議では極めて高く評価され、又国内では連続合成桁の規定に迄成長し発達したものである。地味な研究ではあるが今後の各方面の応用の点でも極めて役に立つものである。特に疲労については独自の研究として高く評価されている。

古稀の商売事始め

筆 幸田 前 野村浩吉

名誉教授 樋崎 正也

拝啓 清涼の候、益々ご健勝にてご活躍のこととお慶び申し上げます。

さて、ここで皆様方にご挨拶申し上げましたのは私が阪大退職した7年前です。月日の経つのは早いもので、第2の職場であった摂南大学も本年3月末をもって無事定年退職しました。摂南では途中2ヶ月余り積年の無理が祟って入院しましたが、皆様方の温かい支えにより教育と研究に楽しい充実した日々を送ることができ、誠に幸せでした。

4月より商売人として船出しましたので、その半年間の様子を記します。

最初は悠々自適の生活をと念じておりましたが、まだ少し若気もあり、無趣味ですから自宅でぶらぶらしていると心身共に良くないと考え、思い切って起業することにしました。業務は今までの知識と経験を活かして主に環境配慮の建物と設備に関するコンサルタントをと思っていますが、当分は空調機の中性能エアフィルター洗浄再生の代理業を中心に運営しています。従来、このフィルターの年間使用量はほぼ150万個以上で、毎年繰り返して廃棄処分されています。従って、フィルター洗浄はコスト削減に加えて、省資源、産業廃棄物削減となり、社会的ニーズに合う将来性のある仕事だと考え、飛びついたのですが、直に商売が成り立つような甘い仕事ではありませんでした。もう既に数年前からの先行業者があり、フィルターの管理・販売ネットワークの信頼関係が出来上がっています。そこに割り込むのは中々大変で、卒業生など知人から有り難い口利きを二三して貰っていますが、未だ商売は成立していません。この商売を始める時に周囲にはコストの掛かる道楽だと揶揄されており、現在は全くその通りですが、焦らずにゆっくりと構えています。従って、今のところ月曜から土曜まで出勤していますが、殆どは今までの延長の学・協会の委員会活動やこれもそうですが、頼まれ原稿書きを少しする程度に明け暮れています。これではいけないので、そろそろ落ち着いて高い部屋代に見合う仕事をしなければと思っています。商売のコツなり、アドバイスなり、何なりとご用命がございましたら、ご連絡下さい。会社(異動会員名簿をご参照)は新大阪駅の近くですので、折があれば是非お立ち寄り下さい。

また、4月からもう一つ休日の仕事が増えました。それは今住んでいるマンションの管理組合と自治会の活動です。マンション生活は40年近くなりますが、家内任せで、私自身マンションの管理・自治運営には無関心でした。今度、暇になったからと、4月に初めて順番が回ってきたマンションの役員会に参加したところ、断る理由が見出せないままに管理組合理事長兼自治会会長に推されてしまいました。10年前からマンション学会に関与し、マンション管理講座の講師など一人前の顔をしていましたが、この度マンション管理の実務に参加し、適切な埋設ガス・給水配管の補修時期、地震対策、長期修繕計画、さらに団地内に付設されている携帯電話通信基地増設に伴う保障など色々解明しなければならぬ事項が噴出し、慌ててマンション学会の資料などを掘り起こして勉強しています。このようなややこしい問題ばかりでなく、自治会活動で、ハイキング、ボーリング大会、夏祭りなど楽しい集いに参加し、お陰で少しは運動にもなり、ストレスの発散にもなっています。

以上が半年間の新生活体験記です。数年後にまた商売繁盛記なり、快適人生記なりが書ければよろしいのですが、目下、馬肥ゆる秋に向かって、如何に食欲を減らすかと悩んでいる今日この頃です。

敬具

歌とこころ

人 詩 理 道 徳 科 目

名誉教授 榎 木 亨

平成12年9月16日久しぶりに京都一中の同窓会(同期会)に出席した。私たちの年代は中学2年で世界第2次大戦の終戦を迎え、中学4年生の時に当時の占領軍命令により学制改革が行われ、新制高校へと横滑りした学年で、不幸にも中学卒業(当時は中学は5年制)の時の同窓会はない。多くは京都一中から鴨沂高校へと移動したが、学区制の関係で堀川高校、朱雀高校にと移動していった人もある。したがって中学時代の同窓会といっても「昭和19年京都一中入学者の同窓会」というかわった名称の同窓会である。世話役は変わらずがんばってくれており、2年毎に開催してくれているが、4年振りに出席した。席上この4年間に逝去された同級生の名前を聞き驚くと共に自分の健康に感謝したが、このような同窓会の締め括りには必ず校歌或いは応援歌が一同によって合唱される。この時も最後に私の音頭によって京都一中の校歌「比叡の峯に茜さす……」、応援歌である一中マルセーユ「見よや一中の健児、知れ一中の意気……」、応援歌「獐猛の意気熱烈の魂ここに……」が歌われた。この同窓会に限らず同窓会において校歌、寮歌が歌われることは多い。また同窓会幹事も心得ていて歌詞を忘れた人の為に歌詞をコピーして全員に渡してくれる。私は京大を卒業して京大助教授より徳島大学、名古屋大学、大阪大学、大阪産業大学と移っていったのでそれぞれの大学の同窓会に出席することが多いが、それぞれの大学で歌われているのはその大学の前身である旧制高等学校の寮歌である。すなわち京大の同窓会では三高寮歌(紅もゆる丘の花……)、ボート部の琵琶湖周航の歌(我はうみの子さすらいの……)、名古屋大学では旧制八高の寮歌(伊吹おろしに草もえて……)、大阪大学では旧制大阪高等学校の寮歌(嗚呼黎明は近づけり……)等である。これらの学生時代友達と歌った歌は50数年後になってもはっきりと記憶しているのは何故だろう? このような疑問を持つのと同時に最近の同窓会に招かれて寮歌が合唱されている年次が卒業後20年以上の同窓会であることに気付いた。すなわちこの頃の学生は単に就職への一過程としか大学を見ていないのではないだろうか? そこには心を通じ合う友を求めることもなく努力もしない。では何故近年になってこの様に学生気質がかわってきたのだろうか。これについては多くの専門家の先生方が解説もしくは分析もしておられるので、教育学の専門でもない私がとやかくいうのは筋違いかも知れないが、偏差値教育の歪みがここに現れている様に思われる。中学、高校の多感な時代に、しかもその頃おぼえた歌を50年たった今でも歌えるような記憶力のある時に、偏差値のみに注意をはらって勉強しては、人間形成の根幹となる心に大きな歪みを与えているのではなかろうか。

人は世につれ、世は歌につれという言葉があるが、若い時代に喜びも悩みも共にした友達と歌える歌が復活して欲しいと願うのは70歳の老人の繰り言であろうか。少なくとも私達は70歳を越えても、「一中マルセーユ」を歌い「琵琶湖周航の歌」を合唱するであろう。

今取り組んでいる仕事から

木村尚三郎

名誉教授 紙野桂人

一昨年秋以来、奈良県が主催する平城遷都1300年記念2010年委員会(新宮康男会長)で、歴史・文化国際交流ゾーン整備検討委員長を務めている。この発足以来すでに一年半あまりを経過したが、その間様々な基本条件を整理検討し、パートナーの記念事業企画委員会(木村尚三郎委員長)ともども計画の柱のすえ方などを議論している。議論を広く全国化するために、「あなたが考える平城遷都1300年の夢」募集も行った。1000点近い応募が国を越えてあり、昨年秋に受賞作品も決定した。この事業の国際性を改めて感じさせられた次第である。ここでいただいた提案は、今後の事業計画にいろいろな形で取り入れて行くことになる。

本年に入って、計画の基本理念・基本方針などを総会で決定し、いま基本計画を固めるべく専門的な検討に入っている。年内には成案の姿を得たいと思っている。

平城京遷都は西暦710年の3月10日(太陰暦)に行われたと記録されている。元明女帝の時代である。これに先立つ701年に大宝律令が制定され(藤原京時代)、遷都に至るまでの約10年間を通じて全国的な施行が実体化されていった。当時は、遣唐使も往来したが、金城(慶州)に都する新羅との交流はより密接であった。昨年暮に慶州を訪れたが、平城に先立つ彼の地の都の姿を思い画いてみると、平城京との親近性が彷彿としてくる。そこで一首、「芬苔の寺門暮色や師走月」。芬苔寺は新羅の名刹である。

平城遷都は、わが国が当時の東アジアスタンダードに基づく「国のかたち」を形成したシンボル・プロジェクトであったと言えよう。そしてこの都が成熟して行く歩みの中で、東アジア3都時代に入っていったのである。その総仕上げが聖武帝による東大寺大佛開眼(752年)であったと私は思う。

このように考えて来ると、この記念事業は、われわれの祖先が1300年前の大交流時代をいかに生き、そのより所としての国のかたちをいかに造ったかを、その中心地において実体験をし再確認する機会ととらえることができる。同時に、世界文明とアジア文明、アジア文明と東アジア文明、そして東アジアの中で磨かれた日本文化、その誕生を支えた大交流の実体、様々な人間像を国を越えて議論する機会とも言えるであろう。

大和の地ではご承知のように日々新たな考古学的発掘成果が生まれて、知の更新が続いている。約8年後にその成果がいかなる事実を示すかという事をしっかり考えた上の基本計画を造らなければならない。同じことが、8年後のIT技術を含めた科学技術の可能性が、その向うへの展望も含めて活かされるシステムづくりについて言えるだろう。さらにその頃の世界情勢、世界交流、文明の中で課題をどう反映するかという包容力あるコンセプトが求められるということもある。

これは大変だというのが実感だが、逡巡は許されない。やるだけのことはやろうと思っている。

なお事業の中でいまの時点で実現確実なものは、すでに建築された朱雀門そして予算化が進む大極殿正殿などである。平城宮の全体像そして平城京の実体像、中ツ道さらには平城に先立つ藤原京、飛鳥古京、斑鳩宮との連携をどうするか、これらの歴史的空間を支える社会基盤をどこまで実現して行くかなど総合工学的課題も実に重い。私はかつて阪大工学部の吹田地区移転に約10年間関与したが、あの頃は若かった。頭も肉体もこれに応えてくれるかどうか心配もある。

都市と水

名誉教授 村岡浩爾

都市に関して忘れ得ないいくつかの言葉がある。

歴史家・木村尚三郎はこう書いている。「国には国境があって、向こうが見えない。その壁をだんだん薄く低くしていくと向こうの人達が見えてくる。やがて言葉をかけ、手を取り合って新しい文化を創っていく。国家は人を内へ内へとまとめて行くが、都市は人の心を外へ広げていく。(NKK都市総合研究所編：環境都市へのアプローチ、住宅新報社、1993)」

神戸新聞編集長・三木康弘は、阪神大震災のあと「最近の神戸は走っとらんともたんような街やった。妙に清潔で、厚化粧で。あまりにもスマートになりすぎて、なんか肝心なものを忘れていたんやないか。この街が被災者の不安や辛さに、どれだけ応え、ねぎらう用意があったのか。(「AERA」1995年2月6日号)」と書いた。

建築家・安藤忠雄もこの震災のあと「元来、日本の都市造りには、欧米の都市に顕著な、都市計画に基づく公の空間を創り出す意識が薄かった。もともと公私の境界が曖昧で、公共という意識の薄い日本では、最低の法規も守れないような増築が個々に重ねられた。住み慣れた街を離れるのはつらいが、この際、曖昧な復興計画を立てるべきでない。(1995年2月5日付「朝日新聞」)」と書いた。

水に関する都市の基盤システムを考えると、「生きるための最低限の水システムがもつ条件は?」、「文化に必要な水とは?」を、21世紀の都市のなかでどう解決し、形作っていくのが問題である。もはや利便性追求型の水問題ではない。

日本はDID人口率は72%に達している。「水の危機」が叫ばれる今世紀の地球問題で、日本がなすべき課題は先ず人口の集中する都市域で水問題を世界に先駆けて解決することであろう。また、新しい環境白書では「環の国(わのくに)」日本を創ろうという呼びかけがあるのだが、さて、このスローガンのもとでわれわれは都市で具体的に何をやったらいいのだろうか。都市型水害を防御するのが第一の課題であろう。しかし、もはやこの政策が全てに優先し、先行させるものとするのは甘い。人々は日頃水害など危険な水の存在を忘れ、飲んで健康な水、見て心地よい水を求めている。更に最近では水と遊びたい、水に気持ちを通じたいという風潮が高まっている。従って治水、上水、下水、環境水といった一元的な政策の展開はもう流行遅れである。お役所が住民のために何かをやってあげましょうとか、住民がお役所に何かを頼みましょうという時代ではなくなってきた。住民自らの参画が水政策の推進に必要なようになってきている。

このような背景のもとで、そろそろ水政策も住民、企業、行政という主体が共に理解できる強力な行動目標を持つべきでないか。例えば、都市において「雨水を100%使う」、「下水を100%使う」、「地下水を100%使う」などの目標はどうだろう。都市の再開発、再整備といった事業のなかで、このような目標を掲げることによって循環型社会の形成、健全な水循環の回復が推進されるのではないか。

先の「環の国」では、包括的な「地球の環」のなかで「環境と経済の環」「物質循環の環」「生態系の環」「人と人との環」の四つの環を考え、その実行の環として「環境と科学技術の環」をあげている。この中で「人と人との環」こそ、これからの都市の水政策に欠かせない参加、連携、協働を意味していると思う。

思い出すことなど

名誉教授 井上 豊

平成13年3月に30年と6ヶ月勤めさせていただいた大阪大学を、無事定年退職することが出来ました。これは諸先輩はじめ周りの皆様に支えられてのことで、心より感謝しています。千里のキャンパスに来ました昭和45年10月は、その半月前に閉幕した万博の直後で、建設棟7階の研究室から未だ建ち並ぶ多くのパビリオンが見渡せ、広大な駐車場がキャンパス内外に拡がっていました。キャンパス内も未整備の所が多く、管理棟の前の坂道は雨の日はぬかるみとなり難渋したものでした。その1、2年前から大学紛争やキャンパス移転などがあった訳ですが、学内は落ち着いており研究・教育も概ね平穏に行われているように見受けられました。

着任後6ヶ月で鷺尾健三先生が退官を迎えられ、講義・演習を3、4科目担当するとともに、研究室の実質的な指導を行うこととなりました。それまで構造力学の講義経験もなく、ノート準備、課題作成、レポート採点とともに、研究室では兄貴分として院生学生と一緒に学び考えながらゼミを持ち、修論や卒論に取り組むと云った毎日でした。また、超高層建築物の出現後間もない頃で、鷺尾先生から「よい所に来た。私の代りに評定委員会に出て欲しい。」と云われ、日本建築センターの委員会に出席させていただき、大阪駅前第3、第4ビル、上本町近鉄百貨店などの担当を仰せつかりました。

以来20年間委員会に加わり、高層建築物の構造設計実務の推移を目の当りにして来ました。特に耐震安全性の確認は地震応答解析によって行われる訳ですが、入力地震動の考え方、振動系モデル及び復元力特性の設定法、地震応答の評価法について、当初は未だ判らない事が多いので取敢えずのケーススタディとして扱われていましたが、昨今は計算ソフトが氾濫し、計算手法は精緻となり数値結果のみが絶対視されて、本来の意味の検討となっているのか懸念されます。1960年代後半から70年代に蓄積された地震応答解析の成果を反映させて、いわゆる新耐震設計法が81年に施行され、関東大震災以来60年近く君臨した震度法による剛構造指向の耐震設計法に取って替ることになった訳です。

高層建築物の耐震解析の研究の一方で、低層建築物の地震時挙動に重要となる地盤との動的相互作用の研究も並行して行っていました。80年代の半ばから、我が国に積層ゴム支承が導入され免震建築物が現実のものとなって来ました。この健全な発展を促すための施策が取られ、研究室の皆さんに迷惑をかけながら幾つかの委員会に出かける羽目となり、その普及のお手伝いを致しました。これも一段落しかけた頃兵庫県南部地震が発生し、この構法が一挙に注目を浴びて関係する委員会は大多忙となってしまいました。機を一にして、地震時や強風時の建物の揺れを抑えようとする制震(振)の技術ならびに実用化の研究が国内外で広く行われるようになりました。研究室でも、免震構造を含めダンパー等を用いたパッシブ制御、アクチュエータ等を用いたアクティブ制御、さらにこれらの特性を効果的に切換えて行うセミアクティブ制御へと研究を展開し、解析と実験を行って来ました。

こうして大学在任中は先輩、同僚、卒業生の皆さんなど本当に良い人達とふれ合うことが出来、楽しい研究生活を送れたことを大変幸せに思っています。

新たな都市環境デザインをめざして —ユニバーサルデザインの新たな展開—

(157) 田中直人

田中直人 (A73)

わが国では、福祉のまちづくりとして障害者の生活環境の整備が進められてきた。すなわち車社会の都市環境に対して人間中心のまちづくりが進められ、健常者だけではなく車いすを使う人たちの外出行動を拡大する運動が展開されたのである。建築物や道路、公園といった公共空間のバリアフリーがテーマであったが、障害者としては車いす使用者が中心であった。車いす使用者だけではなく視覚障害者、聴覚障害者等の情報障害者に対する配慮も試みられている。しかしその具体的な内容についてはまだまだ不十分と言える。最近では高齢化の進展と共に高齢者対応の都市環境の整備が問題となっている。これまでの障害者を考慮したバリアフリーに加えて、より多くの人々のことを考慮した環境のあり方が論じられている。すなわち、障害者対策から高齢者対策と移行する中で特定の人のためのデザインではなくて、より多くの人々のためのデザインが求められるようになってきた。いわゆる、バリアフリーからユニバーサルデザインということであるが、別の言い方をすればより進んだ本来のバリアフリーを実現することである。今、あらためてこれまでの福祉のまちづくりの範囲を超えて、都市環境のあり方を再構築していくことが求められる。

例えば、これまでの福祉のまちづくりの中では、車いす使用者を考慮して床面の段差をなくすことが至上課題ようになっていた。また、都市における自動車と歩行者の安全・快適な環境作りの視点からそれぞれの分離を前提とした都市環境デザインが進められてきた。

歩車道の境界はガードレールなどの堅い工作物ではなく、植え込みや街路樹のみどりによって彩られることも多い。しかし、時と場合によって、これらは思わぬ危険要因となる。視距を妨げたり、歩行者の歩行空間へのバリアとなる場合がある。また、剪定などの管理が悪ければ、大切な交通標識や交通信号を見にくくすることもある。ただ単にみどりの量だけを誇るような都市環境デザインは評価されない。すなわち都市環境の安全性の面からも考慮されるべきである。また、せっかく段差によって安全性を確保しようとしても、歩道を横断する車の進入路の設置によって、路面が傾斜し、でこぼこにうねっている景観はけっして美しいものではなく、多くの歩行者には危険な状況を呈している。景観上の問題として、歩道上に設けられた点字ブロックの黄色が話題になることがある。この黄色がよろしくないとして、舗装面の仕上げの色と同系統の色に変えたが、逆に視覚障害者の関係者からは弱視者等にはわかりにくいと不評でまたもとの黄色に変更したという事例もある。すなわち、目立つデザインをめざすべきか、目立たないデザインをめざすべきかよく考えないといけない。点字ブロックの貼り方は実にバラエティに富んでいる。電柱やマンホールを避けるカーブ状のものや駅のプラットホームでは柱を回避するために直角に柱ごとにまがっている例もある。つくづく目の見える人が頭で考えたものだと思う。

これまで私たちがバリアフリーとして、あるいは一般的な都市環境整備の一環として取り組んできた整備の状況をみると、その大部分はこれまでよりは人にやさしい環境の実現につながっているものである。これらの努力を発展させていくことが重要と思われる。しかし、一方では、それらの効果や新たな課題に対して十分に対応していく必要のあるものも多い。これまで多くのかたがたがアメリカから輸入されて、広めようとしてされているユニバーサルデザインということですべての要求がひとつの明確な答えとして示し得るとは思われないが、今後の研究によって改善されたものが登場することを期待したい。けっしてマニュアルのとおりに進められるデザインではなくて、自然環境や歴史的環境の条件に応じて個性を持ちながらもなじみやすいデザインが期待される。大きな意味で本当に人にやさしい都市環境を実現するには、各国各地域に存在していて、場合によると見逃してきたようなアイデアやしぐみを再発見することから始めてもよさそうだ。そのようなデザインが登場するときにはこれまでのユニバーサルデザインは新たなデザイン領域を描くだろう。

福祉行政体験記

磯崎 弘 治 (C80)

土質研究室で修士課程を修了し、大阪府に勤務して今年でちょうど20年目になる。

入庁以来、モノレール建設、道路計画、駐車場建設、区画整理、連続立体交差など主に都市基盤整備行政に関わってきたが、昨年4月に突然、健康福祉部(障害保健福祉室)への異動を命じられた。辞令交付の日に構築会所属の某幹部のところへ挨拶に行き、「土木職の私が福祉で何をすればいいんでしょうか?」と尋ねようと思った瞬間、「おまえさん、福祉で何すんねん? まあ好きに暴れてきたらええわ。」と先に言われてしまい困り果てたことをよく覚えている。

健康福祉部という組織の中で、土木屋としての自分の存在価値を見出すために、まずはそのとき注目を集めていた「交通バリアフリー法」の研究にとりかかったが、法律上は都道府県の役割はほとんど何もないのに等しいのである。次に、厳しい福祉予算の中で削減寸前であった鉄道事業者へのエレベーター補助事業を拡充すべく、土木部と建築都市部相手に議論を戦わしたが、両部とも新規事業を起こせる余裕はなく、暗礁に乗り上げてしまった。鉄道会社へも出向いていき意見交換したが、彼らも交通バリアフリー法の制定・施行の流れの中で、国と地方公共団体の動き方を読みあぐねていた。一方、夏の盛りになると障害者団体との応接(団体からの要望に対する府の回答の場)が始まり、生きた議論の体験を期待して参加したが、少し言い過ぎかもしれないが、共によりよい福祉施策を構築しようという理念からはほど遠く、どの部局でいかに上手に言い訳するか内部調整に労力の大半が費やされていたように思う。

これらの体験を積む中で徐々に見えてきたことは、福祉のまちづくりを進める上で決定的に欠けているのは、情報(障害当事者の思い、各行政体や事業者の考えなど)を一元的に把握し、有効な施策の組み合わせを立案して、その実施を強力に各事業者に要請する組織の存在であり、その役割は都道府県が担うべきではないかということである。国が法や制度を整備し、市町村が基本構想を作成して民間(NPOなど中間法人を含む)と協働して事業を展開する流れが定着していく中で、大阪府(とりわけ技術職員)がこのコーディネイト役をきっちり果たせなければ、福祉のまちづくりを含む都市再生の実現は困難であり、中間行政体としての存在意義も失われてしまいかねない。

最後に、この1年間の福祉行政体験の中で、私の頭に残った3つの話を紹介させていただいて拙い寄稿文を閉じようと思う。

1. テンポラリーアビリティ (Temporary ability / 一時的な能力・完調)

これは昨年色々アドバイスを頂いた大阪脊髄損傷者協会の辻一会長が、講演会などでよく紹介されている考え方である。

人間は生まれ出た未熟な存在から成長し続けて20歳前後をピークにして老化していく。一人の人間が高い知能や身体能力を持っている時期はその人生の一部でしかない。しかもその期間内でも完全に調子のよい日は少ないように、人はもともと不自由で不完全な存在である。従って、社会的強者を標準とせず、社会的・身体的弱者を標準とすれば誰もが使いやすい社会を作ることになる。

2. エスカレーターの左側優先通行

関西では駅や大型店舗のエスカレーターは、左側を急ぐ人のために開けるルールが定着している。しかし何らかの理由で(例えば右側の肢体不自由の方など)左側の手すりしか持てない人にとっては、立ち止まっただけで周囲から露骨に嫌な顔をされ心理的負担がかかる。このことに配慮して在阪鉄道では「急いでいる方のために左側をお開け下さい。」というアナウンスはやめたそうである。アナウンスの可否よりも利用者の気配りの問題であると思うのだが…

3. 交差点の歩道段差切り下げ

これはある研究会で盲学校の先生から聞いた話。ある交差点で歩道の段差切り下げが行われたところ、車椅子やベビーカーの利用者には大変好評だったが、白杖を使う視覚障害者は歩道と車道の段差が識別しづらくなって横断歩道の利用に不安を覚えたそうである。全てのニーズに応えるのは本当にむずかしい…

この3つの話を福祉のまちづくりのトータルデザインの中でどのように組み入れるのかを考えるとき、今よりも少し柔軟なアイデアが生まれそうな気がする。

長期の視野と利用者の声

大野拓也 (A96)

2001年4月より兵庫県立福祉のまちづくり工学研究所(*1)に非常勤研究員として勤めている。障害を持つ方にお会いする機会も増え、多くのことを教えてもらっている。以下に思うことを率直に書きたい。

設計の際に、基準に決められた寸法だけで判断するのではなく、利用者を想像できなければ、せっかくの整備も効果が半減する。また、条例などで基準化することや、基準に沿って整備しただけでは、逆に利用者にとって使いにくいといった弊害が生じる場合がある。さらに、福祉用具・機器についての知識は、建築関係者にとっても、今後不可欠な情報であると考え。電動車いすを例にとると、バッテリー持続時間の延長、操作性といった性能が年々上がっている。これが何を意味するかというと、今まで外出を控えていた、もしくはできなかった重度の障害を持つ人も、まちの中へ出られるようになる。本体重量だけで80kg近い電動車いすを、エレベーターがない建物や駅舎において、担いであることは非常に大変である。いずれは、例えば数十cmの段差をものともしない電動車いすなども実用化されるかもしれないが、現状の段階では、建築的に動く範囲が限られている。公共空間や建築物がそういった開発の流れに対応できているだろうか。

福祉のまちづくりの代表的な整備には、「段差解消」や「誘導点字ブロックの敷設」があげられる。段差の例として、歩道から車道への段差を考える。車いすを利用する人にとっては、段差はない方が利用しやすい。しかし、目の不自由な人にとっては、段差があったほうが、歩道から車道に出たということが確認できて安全なのである。このあたりの違いをどのように解決していくか。点字ブロックに関しては、視覚障害の方に話を伺ったところ、よっぽどの事がない限り初めての場所には一人では行かないという。何度も通う間に、要所要所の場所の確認として、点字ブロックを利用している。私はここで、決して既存の点字ブロックを否定しているわけではない。重要伝統的建造物群保存地区など有する自治体では敷設することに抵抗感をもっていることや、また点字ブロックによる高齢者などの転倒事故の現状を見据えて、本当にあの形状・色がすべてなのか、再確認してもよいのではないか。

まちづくりの整備を進めるにあたって、建物単体だけではなく、全体として考える必要がある。その中で、「福祉マップ(車いすガイドマップ)といった各地域の整備状況を情報化した媒体の存在」、「既存施設の改修を進めていくこと」の2つが重要な課題である。障害をもつ方は、外出時に目的地やそこまでの経路についての整備情報を、集めてから外出するのだが、前者の存在はその際の有効な手段になる。同時に、その地域における今後の整備課題の方針を立てる際にも重要な資料となる。自治体等では、既に立派な福祉マップを作成しているところもある。それら貴重な情報の他地区との共有化(横のつながり)、情報の更新、などが今後の課題である。

後者の改修のほうは、実際にどう進めていくかとなると、そう簡単ではない。推進していくには、意識改革、資金補助、法的処置といった方策があげられるが、それらが機能するためには時間がかかる。ご存知のとおり、まちづくりといったものは、数年で形になるようなものではない。少しずつ積み重ねた結果が、徐々に効果をあらわしていく。しかし、まちづくりの主体となるはずの行政機関において、担当者が数年で変わる現状では、そのような長期のビジョンをもてるのであろうか。また、公共建築物の維持費・管理費に予算がほとんどおられない現状を考えると、既存施設のバリアフリー化にお金をかけることは根本的に難しい。

結局のところ、まちづくりにおいて障害をもつ方々への配慮はまだまだ低い。その根底には、無意識のうちに「私たちは同じような身体機能をもっている」と理解している人が多いように感じる。私たちは、それぞれ違うのである。私は6年程前に約1年間の松葉杖生活を送った。それまでも、障害をもつ方への配慮の重要性を、頭では認識していたものの、想像していたものと現実とでは大きく違った。障害をもつことを想像することは難しい。だからこそ、整備に際しては、実際の利用者の声をフィードバックさせながら勧めていくことが、とても重要であり(*2)、今後はそのような視点からの計画が主流になっていくことを強く願う。

*1 所在地：〒651-2181 兵庫県神戸市西区曙町1070 総合リハビリテーションセンター TEL 078-925-9283

*2 大野拓也、柏原士郎、吉村英祐、横田隆司、阪田弘一：車いすの利用しやすさからみた大学キャンパスの実態調査、日本建築学会近畿支部研究報告集第36号・計画系、pp.637-640、1996年7月

構築科卒業半世紀を迎えた同期生の近況

木田 五一郎 (C51)

昭和26年3月に構築科を巣立った我々は、今年は卒業50年に当るので昨年から一度集ろうという話があり、小生は井上洋里君と計画し、今年の7月26日に大阪で集ることに決め、6月4日付でその案内を土木・建築の全員に出していた。またその出欠返事の手紙の余白に各自の「近況」を書いてもらい、この手紙の近況文はコピーして当日全員に配ることにしていた。そこへ6月29日付で「構築会だより」編集担当の西田修三先生から原稿依頼があった。このようなことから7月26日の同期会で手紙のコピーを全員に配ると同時にこれをまとめて「同期会の近況」として「構築会だより」に寄稿する了解を得た。以上の経過から本文は手紙文通りでなく、挨拶文の削除や、後日内容の加筆修正された箇所もあるが、同期全員15名の近況報告であり、また年齢から体調に関するものが多く、御一読いただき今後の参考になれば幸いです。

奈良 計宏 — 本年4月子供達3家族(総勢17人)で有馬で金婚式を祝ってくれた。その時卒業50年を意識したが、その場限りで、今回幹事から案内を受けるまですっかり忘れていた。過ぎ去った50年は速かった。しかし振り返れば色々あった。オイルショック、それに続く贈収賄事件等々凄いストレスを受けた。お蔭で田中角栄総理、黒田大阪府知事並みに顔面麻痺を起した。その後遺症で数年後には吐血した。にも拘らず耐えられたのは北新地のお蔭、酒が飲めるし好きだった。祝勝会、残念会、接待と言いながら連日飲みまくった。ストレス解消に利用した。またタクマもそれを容認してくれた。正に企業戦士であった。71才で全ての役職から引退した。悔い無き半生であった。現在前立腺ガンを宣告されているが、余り気にしていない。

木地 晴彦 — 残念乍ら体調が良くなく、出席は無理だと思います。昨年8月と今年の4月に脳梗塞で倒れ入院しました。退院はしたもののその後遺症で聴覚が全く駄目になり、強度の難聴になりました。人の言うことが聞きとれず、そのため会話が全く出来ず電話にも出られない状態で回復にはかなりの時間がかかりそうで、悪しからずご諒承下さい。

浦山 康正 — 構築工学科創成期、少数26名の我々は団結心が強かったですね。生存者15名中、今回11名の会合では、20歳前半当時の若き顔付きに戻って談笑が行われるのを楽しみに出席致します。近況ですが人並みに体調を崩して(脳梗塞)68歳で退任し、治療に専念の結果、72歳相応の健康を維持しています。

中北 保次 — なんとか出席しようと思いましたが、退院以降も次々と持病が続く、未だ体調悪く病院通いが切れません。出席は無理です。

吉田 昭二 — 5年前に脳梗塞で入院以後病院通いが欠かせなくなり、一人旅もむつかしく今回も欠席します。今は庭の草花いじりと3年前からボケ防止のためパソコンを始め、インターネット、デジカメ等、孫(小5、中1、高1)を相手に楽しんでいます。

庄子 徹 — 毎日、雑事と碁の勉強とノートパソコンでゲームをする、これの繰り返しです。週に一回、京橋の碁会所に行くのを楽しみにしています。

猪口 弘 — 昨年白内障の手術をしましたが今は健康です。しかし体力智力は年相応ですが、気力のみ60才台のつもりです。年何回かの国内外の旅行を楽しんでいます。暇つぶしの下手なゴルフと日本酒も大好きなので永く続けたく健康管理に気を付けたいと思っています。当日皆様に会えるのを楽しみにしています。

千原 昇 — 定年後、古寺探訪・バードウォッチング等に行っていましたが、最近は中山道・熊野古道その他旧街道を訪ね、又山野草等の自然観察を兼ねてハイキングをしています。段々体がついて行かなくなりましたが健康のため出来るだけ外に出掛ける様にしています。

井上 洋里 — 大阪市役所32年間、日本鋼管(株)16年間の勤め、48年間の橋梁技術者生活からリタイアしていたところ、健康状態が大変良好であったので、人のすすめで(株)エービーシー商会の顧問として建築・土木材料の販売会社に勤めています。又年2回開催されている大阪大学土木会(ゴルフの会)には猪口君と共に会の最長老として元気に楽しく参加して居ります。

寺田 自助 — 最近、老化現象なのか体力がぼつぼつ下降しつつあり、歯は半分入れ歯、眼は白内障になる恐れあり(通院中)、血圧も少し高い(投薬せずに運動に心掛ける)。全体として病気はなく元気です。

伊藤 俊夫 — 卒業以来早くも50年、短いようにも思えるし、又永い年月だったようにも思える。さて近況であるが、特に悪い所は無いが74年間酷使した体には時にキシミを感じる。昨年6月、松村組を辞しヤレヤレとのんびりボランティアの積りで始めたリサイクル建材が売れ出したため、又多忙な日が始っています。皆様との再会を楽しみに。

椋代 仁朗 — 大学を退いてから5年を迎えました。お陰様で特に病気もなく元気で過しております。現在建築士資格試験業務、建築鉄骨製作工場性能評価などのお手伝いをしてまして、結構忙しくしております。出来るだけ外に出て園芸(野菜作り)に時にゴルフ練習に精出しています。

松浦潤一郎 — 昨年或は一昨年頃から老化のピッチが早くなっている様です。病気を友にして生きている感じです。趣味を昔に戻して体の調子のよい日は近郊の名勝・古建築等のスチール写真を撮るのを楽しみにしています。

村田千之助 — 特別に何もしていません。体調は老人病を2つ持つ以外は健康です。運動として、最近は少なくなりましたが歩くことを趣味としています。またたまにコースに出ますが、市内のゴルフ同好会でグランドコースをやっています。他に住居地域の老人会の役員をしています。

木田五一郎 — リタイア後私は町会や家業の不動産管理等雑用に追われていたが、平成8年1月、起床時にゲロをはき、急な後向きで頭がフラつくようになった。耳鼻科や脳神経内科で椎骨脳底動脈循環不全症といわれ、他の脳外科では首の骨のMRI写真で見てもらったら、「手術をすれば治るが、何かリスクが出るかも知れない。若ければ手術を勧めるが、現在日常生活で特に困らないならばこのままで困ようになった時に、君の判断で手術すればよい」といわれ、今もそのまま投薬を受けている。他の脳外科でも診察を受けたが、「この位なら手術不要」とはっきりせず、このようなことは最近話題のインホームド・コンセントに関係していると思われるが、私の今までの病気への対応に問題があったのではないかと反省し、今後医者との付き合い、体調管理に努めて行きたい。



構築26年同期会にて 平成13年7月26日 於：大阪駅前阪神地下食堂

40年の回想

安原 秀 (A61)

大学卒業40年の感想と言われて、まっ先に思い浮かんだのは雑誌のグラビアページの連載などで紹介されている誌上同窓会の写真である。他人事だったものが、そうなんだ自分もあの状態になったのだと妙な感慨を感じたのである。さて、自分のこととして思いを巡らせてみると、ぼんやりとしたノスタルジックな部分と、現実感が相半ばしている。卒業した年は？ 昭和36年(1961)。自分の時代はどんなだったのだろう、思い浮かぶシーンを列記してみよう。

□ 学生時代の記憶でまっ先に浮かぶのは、即席チキンラーメンを食べながら徹夜をするのが常だった製図室。コーヒーと共にインスタント食品が出はじめた頃だった。東京で学生の死者を出した60年安保、京大から来ていただいた講師の先生と問答をして休講にさせていただき、帰っていただいた失礼の記憶と、御堂筋いっぱいフランス式デモの記憶は今も鮮やかである。そして、ハイカラな友達につれられてその味を知った、薄暗いジャズ喫茶で足をゆすっている風景もくっきりと頭に残っている。

□ 建設会社の入社式には全国からやってきた200人の同僚がいた。入社2年目の仕事場だった豊田市のトヨタ自動車の本拠では、とてつもなくでっかい工場群と見渡す限りの社宅群に驚いたの記憶が残っている。大阪に帰るのに走った名神高速道路には路肩で時折オーバーヒートした車がボンネットを開けて停まっていた。国産車では100キロでの連続運転が出来なかったのだ。

□ 東京オリンピックを三重県の長島温泉の現場で図面を描きながら、カラーテレビで見た。新幹線が東京大阪間を走った。ニックネームは「ひかり」だと思ったが、その通りになった。

□ 阪急三番街の現場で図面をそちのけにして、人類の月面着陸のシーンをくいいるように見た。同時通訳のおじさんの声がやけに耳に残っている。

□ 中之島のレンガの裁判所の前をはじめとする川の中に巨大な高速道路がどんどんと出来た。すごく便利な世の中になるのだなあと、感心していた。大阪で万国博覧会が開かれた。

□ その頃、森の宮の駅前に出来た公団住宅に入居した。14階建の都心団地で、まじでアメリカの住宅に住むような気がしたし、タクシーの運転手さんに羨ましがられもした。5万5千円の月給から1万7千500円の家賃を払っていた。2DK・40㎡、ステンレス流しと水洗便所だったが、洗濯機置き場は計画されていず、1階にコインランドリーもなく、これは風呂場の中に置けと言うことかと思った。中廊下型だったが、食事時の一定時間だけ共同の換気扇が運転された。人はみな同じような生活をして生きていると思われていたのだろう。

□ 勤めていた会社を辞して、設計事務所を始めてしばらくしてオイルショックになった。仕事がなくて仲間と碁や将棋で時間を埋めた。仕事は自前でつくらねば駄目だと感じて、エンドユーザーに直結するコーポラティブ住宅の設計をやりはじめた。それ以後、社会を見る視点が供給側から需要者側へはっきりと移った。駅など公共の建物では電灯の点灯を半減していたので、街がとても暗くなっていた、しかしいつの間にか雪が融けるように明るくなった。

□ 40年間の後半にあたる80年代以降の出来事では、全員で夢を見ていたバブル期とその崩壊。破壊された街を見て息をのんだ阪神淡路大震災、街を見て涙がでたのはあとにも先にもこのときだけだ。いずれも後処理が残されている現状で、リアルに今と直結している。

61年卒業組は建築16名、土木21名であったが、残念ながら建築で1人、土木で2人の3人が亡くなった。建築の人が中心となった有志でこの20年間、年1回ゴルフ会を行っており、その際に不参加者も含めた現況を確かめ合っているが、高度成長期をひたすら一緒に走ってきた同期生にも最近では、仕事等の日常生活に、健康の度合いにと少しずつづばらつきが見えてきている。しかし、いつまでも元気で世の中にコミットしていこうと言う強い思いには同じものがある。

卒業20年目になりました

寺田 均 (A81)

そういえば、卒業してからもう20年目になりました。我々の年代は、私が記憶している範囲では、同窓会がありませんでしたが、先日、ちょうど東京組の同窓会があったので、報告させていただきます。

私は、入社以来20年間、建設会社の大阪本店で構造設計をしてきました。ところが、最近は、転勤や退職で送別会が多くなっていて、昨年末あたりから毎月、送別会をやっている気分で3月末にも東京に転勤する友人の送別会をしました。その直後、4月1日付けで私自身が東京に転勤になりました。不慣れな環境に戸惑いながらも、仕事に追われているときに、東京組の同窓会に誘ってもらいました。6月13日に、西新橋の「クラブL」で、昔懐かしい顔に久しぶりで会いました。井川、市ノ瀬、新村、菅原、姫野、前田と構造系のメンバーが中心でしたが、髪の毛の色と量(このメンバーは年の割には髪の毛の自然減は少なく、昔の長髪をサラリーマン風にカットしたという意味です)が少し変わっているのを除けば、ほとんど変わっていませんでした。世間的には、会社や社会の中心年代ですが、仲間だけの会話となると昔のままで、自分だけが成長していないのではという、日頃の不安が少し解消しました。

その日の話の最後に、S原氏が「そういえば、卒業20周年で代表者が構築会だよりに原稿を執筆することになっていて、10周年のときには私が書いたが、今度は頼むよ」という話があったような気がしたのですが、少し酔っていたこともあり、その日はそのまま良い気分で帰りました。その後、7月24日になって、編集担当幹事の西田氏からの「7月末までに原稿頼みます」という電話で、やっと思い出して急遽執筆しているところです。

ということで、乱筆は許していただくことにして、入社以来、建設業は景気の良い業種との接触が多いということを感じてきましたが、最近は良いところがないような気がします。景気がよくなりそうにありませんが、振り返れば、就職したときもよくはありませんでした(図-1を参照して下さい)。これ以上悪くならないことを信じて、30周年まで頑張ろうと思います。

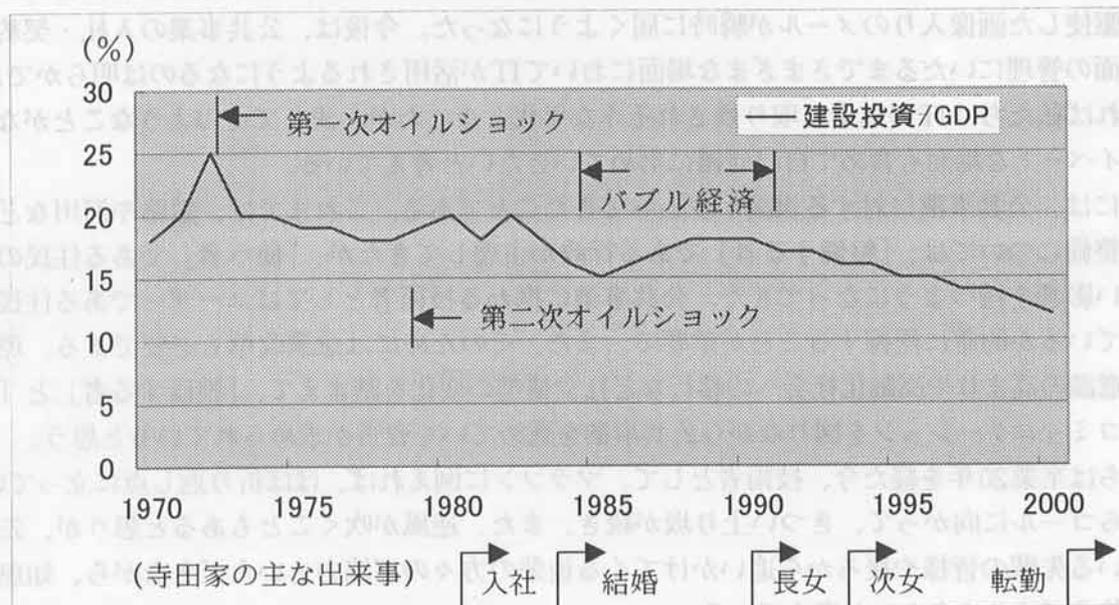


図-1 建設投資/GDP と寺田家の主な出来事

大阪支部だより

大阪支部では、平成13年9月12日に見学会、総会および懇談会を行いました。

見学会は、弥生時代への誘い(土木遺産と近代建築が融合した狭山池へ)をキャッチフレーズに土木建築事業に関係の深い文化財をテーマとして、著名な建築家である安藤忠雄先生が設計された「狭山池博物館」と弥生時代の環濠集落の史跡を公園にしている「池上曾根史跡公園」で行いました。

天候にもめぐまれて支部会員約100名の参加を得て盛況のうちに終わりました？

このようにお知らせしたかったのですが、今年から急に「構築会だより」の発行を2ヶ月ほど早め、9月末に発行するとのことで、7月末にこの原稿を書いています。したがって、支部行事の報告をすることもできず、また、皆さんのもとに届く時には見学会、総会も終わっている頃で、見学会のPRをしても役に立ちません。

そこで、平成13年度の支部役員を紹介させていただきます。

支部長	辻 征雄 (C40)	
副支部長	河上 隆志 (A44)	野口 恵司 (C46)
監 事	福来 知自 (A47)	中村 順行 (C49)
幹 事 長	辰谷 義明 (C55)	
幹 事	森崎 論志 (A50)	榊原 範明 (C53)
	口野 繁 (C53)	鈴木 宏彰 (C57)
	山中 俊夫 (A57)	鳥牧 昭夫 (C61)
	椎名 辰之 (A63)	小池 重一 (C63)
	鍋島 康之 (C63)	松並 正 (CH3)
	玉山 彰子 (AH7)	

大阪支部の皆さん、本年度は、このメンバーで支部運営を行っていきます。今後とも、見学会、総会、懇親会の参加を待っていますので、気楽に来ていただきますようお願いいたします。



狭山池博物館



池上曾根遺跡

【幹事長 辰谷 義明 (C55) 記】

愛知支部だより

東海三県といわれる愛知県、岐阜県、三重県では現在盛んにインフラの整備が進められています。名古屋空港に代わる中部新国際空港、2005年に開催予定の愛知万博、第2東名・名神自動車道とビッグプロジェクトが現在盛んに建設されています。これに加えて、リニア中央新幹線、首都機能移転などが実現すれば、さらなる需要が見込まれます。元来東京、大阪に比べインフラ整備が遅れていた東海地方ですが、日本の真ん中という有利な地理条件を活かして、ここで一気に飛躍し、花開かせたいところです。



集合写真



青木伸一さんのご講演



懇親会状況

この地は、大阪大学出身者が多くはないのですが、それだけに何かのきっかけで出会うと同窓のご縁でたちまち仲良くなってしまうという特色があります。

去る2001年3月29日(木)2001年度支部総会を19名の参加を得て開催いたしました。

まず、「三河湾・浜名湖の水環境と水質改善への取り組み」と題して、豊橋技術科学大学助教授の青木伸一さん(C81)にお話をいただきました。これは、新聞に大きく掲載され、地球環境保全の重要性を背景にして、一般市民のレベルにまで反響の大きかった研究成果です。

その後、総会を開催し、新役員の選出を行いました。変化の激しい時勢を鑑みて、役員体制は10年程度若返りを図りました。

選出された役員は以下のとおりです。

支部長	英比 勝正 (C72)
副支部長	安原 良一 (C71)
顧問	大藪 貞利 (C56)
	今倉 邦彦 (A57)
監事	矢野 修一 (C74)
幹事長	降旗 達生 (C83)

また、昨年度は親睦をさらに深めるために親睦ゴルフ大会を5月と9月に開催しました。延べ13名の方が参加し、懇親を深めることができました。

本年度は、新支部長のもと、現場見学会やメールの活用による相互交流を深めていきたいと考えています。

東海地方にご異動の際には是非お仲間に加わってください。

【幹事長 降旗 達生 (C83) 記】

東京支部だより

東京支部では、毎年7月に総会・懇親会を開催しています。さらに、隔年ごとに講演会を併催しています。平成13年度は、7月10日に第15回総会・懇親会を開催しました。

総会では、今年が2年毎の役員改選に当たる年でありましたので、下記のとおり東京支部長として吉尾正彦氏(A63)から柴田陽一氏(C66)にバトンが渡されました。また、幹事についても若手支部会員に対するパイプ役も兼ねて若返りを計っております。

懇親会では、本部より松尾純構築会会長、建築工学専攻長の橘英三郎教授、土木工学専攻長の松井繁之教授をお迎えして、100有余名の参加者のもと盛大に開催されました。

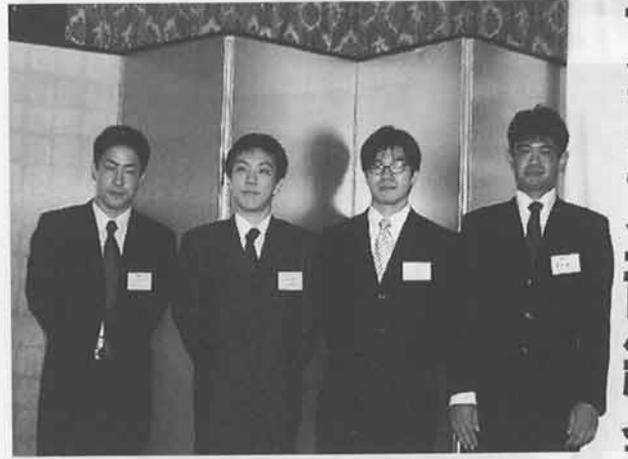
平成13年度 東京支部役員

支部長	柴田 陽一 (C66)	幹事	津田 勝利 (C79)
副支部長	中村 康一 (A71)	幹事	新村 洋行 (A81)
監事	丑場 英温 (A78)	幹事	前田 信之 (A81)
幹事長	井澤 衛 (CM79)	幹事	鬼丸 貞友 (A82)
幹事	栗本 雅裕 (C76)	幹事	浜井 邦彦 (C82)
幹事	中本 泰弘 (C76)	幹事	大田 哲也 (C83)
幹事	堀内 辰夫 (C76)	幹事	米島 幹雄 (C89)
幹事	梅谷 弘 (C76)	幹事	西山 誠治 (C91)
幹事	池田 正人 (C78)	幹事	松野 正見 (C97)

今年の東京支部のトピックスは、東京支部ホームページの開設です。IT関係ご専門の幹事堀内氏(C76)を管理者として立ち上がりまして、総会にて承認後活動に入ったところです。主に、会員間の通信、学年毎の会合連絡、研究室の連絡を手始めに活発に使用して行ければと考えています。



1960年代の卒業生の方々



2001年卒業生の皆さん

【幹事長 井澤 衛 (CM79) 記】

兵庫支部だより

兵庫支部の活動を報告します。

1 平成12年度総会・講演会・懇親会を平成12年11月14日(火)午後神戸市水道局北野会館において開催しました。総会は来賓に地球総合工学専攻長今井克彦教授及び高原疆次構築会会長をお招きし、参加は44名でした。

つづく講演会は講師に関西国際空港(株)建設事務所次長の白石修章氏(C76)をお招きし、「関西国際空港建設における水域環境の保全と創造について」と題してお話いただきました。関空ではコンピュータ処理による環境監視システムを確立し、監視・予測結果を工事施工現場へフィードバックすることにより水域環境の保全と創造に取り組んでいること、関空島の護岸の90%に藻類が付着し、魚類の産卵の場になるとともに二酸化炭素の固定や酸素の発生に寄与していること、1期工事の環境「創造」から2期工事では環境「保全」に移行していることなど興味深いお話しをお伺いすることができました。

講演会の後、懇親会を開催しました。

2 平成13年度第1回幹事会を平成13年5月11日(金)午後兵庫県職員会館で開催しました。12年度の活動報告及び決算報告と13年度の活動計画及び予算審議が主な内容でした。

平成13年度は入江恂一支部長(A62)、岸田威副支部長(C66)のもと、下欄に示す役員で支部の運営をしていくこととなりました。どうかよろしく願いいたします。

兵庫支部の年間予算は約89万円で、総会の他に見学会、懇親会を開催しています。平成13年度の見学会・総会・懇親会は10月に開催予定です。

また、会員相互の情報交換や連絡の簡略化等を目的としてメーリング・リスト(ML)を活用することについても話し合いをしましたが、プロバイダとの関係等課題も多く、今後、継続して検討していくこととなりました。

支部長	入江 恂一 (A62)		
副支部長	岸田 威 (C66)		
監事	亀本 博文 (C65)	西田 泰悟 (A68)	
幹事長	本井 敏雄 (C75)		
顧問	松浦 勢一 (C53)	王 柏群 (A54)	佐伯 幸生 (C57)
	木村 公之 (A59)	明渡 烝輔 (C65)	
相談役	神田 徹 (C63)		
幹事	山口 征宏 (C69)	志波 秀明 (C71)	佐俣 千載 (C71)
	渡辺 哲男 (C71)	川谷 充郎 (C72)	橋本 彰 (A72)
	中山 久憲 (C73)	泉 純一 (A76)	榊原 敏夫 (C77)
	道奥 康治 (C77)	金川 裕一 (A78)	園田 学 (A78)
	大原 良夫 (C79)	桜井 秀憲 (C80)	富岡 洋 (A80)
	田谷 孝壽 (A83)	松井三思呂 (C84)	秋川 宏之 (A88)

【幹事長 本井敏雄(C75)記】

広島支部だより

構築会広島支部は1999年の5月に発足し、今年で3年目を迎えています。

今年の2月26日には、ご多忙の中を我が母校の松井繁之教授に広島へおこしいただき、近年クローズアップされている構造物の維持管理をテーマに講演を頂きました。長期不況で建設投資縮減の中、既存構造物の延命化、ライフサイクルコストのミニマム化などが今後益々重要になり、構造物の設計思想も合理的な性能照査型への移行が進行しています。我々建設技術者はこのトレンドに乗り遅れない様に自己研鑽に努めていく必要のある事を、松井教授の講演で再認識させられた次第です。

講演の後の懇親会では松井教授との対面が久しぶりという面々が多く、大学の近況などもお聞きして昔の思い出話などに花が咲いていました。今後も母校の先生をお迎えした講演会などを企画していきたいと考えておりますので、何卒宜しくお願いします。

なお松井教授におこしいただいた後の3月24日、広島地方は芸予地震に襲われました。昨年の鳥取西部地震に続き中国地方を襲った地震でしたが、幸いにも阪神大震災のような悪夢の再現はありませんでした。しかし構造物やライフラインにも少なからず被害が発生し、以後構築会広島支部の会員の方々もこれの対応に追われることとなりました。中山副支部長におかれましては、全国15の大学・研究機関の幅広い分野の研究者を集めた文部科学省の特別研究の代表者として、その取り纏めにあたっておられます。

何やかやで今年度の広島支部総会は残暑厳しい夏の終わりになってしまい、会員の皆様には大変ご迷惑をおかけしました。小さい所帯の広島支部ですので今後は懇親ゴルフなども企画し、もっと気軽に会員が集い親睦を深めて行きたいと思っておりますので、ご協力の程お願いします。



講演会場にて、松井教授を囲んで

- | | |
|------|-------------|
| 支部長 | 江草 拓 (C63) |
| 副支部長 | 中山 隆弘 (C68) |
| 幹事長 | 加地 健一 (C71) |
| 副幹事長 | 芥川 省三 (C74) |
| 監事 | 坂手 道明 (C71) |
| 幹事 | 武村 哲夫 (A76) |
| | 増田伊知郎 (C80) |
| | 蒲原 幹生 (C87) |
| | 亀田 陽市 (C90) |
| | 南 博高 (C95) |
| | 金島也恵子 (C99) |

【幹事長 加地 健一 (C71) 記】

2000年度会計報告

(平成12年5月3日～平成13年4月20日)

＜ 収 入 の 部 ＞

	1995年度	1996年度	1997年度	1998年度	1999年度	2000年度
会費	8,980,000	6,489,500	6,826,800	8,182,500	5,949,500	6,419,300
広告料	2,197,905	1,837,837	1,778,270	1,140,000	1,660,000	1,160,000
利息	7,017	4,636	7,476	3,032	1,974	1,960
寄付金	0	0	162,561	0	0	0
単年度小計	11,184,922	8,331,973	8,775,107	9,325,532	7,611,474	7,581,260
年度繰越	5,210,117	7,398,949	7,029,955	6,732,258	7,586,460	6,991,873
収入計	16,395,039	15,730,922	15,805,062	16,057,790	15,197,934	14,573,133

＜ 支 出 の 部 ＞

	1995年度	1996年度	1997年度	1998年度	1999年度	2000年度
名簿印刷費	4,271,972	4,378,015	4,006,118	3,819,400	4,690,713	4,255,587
郵便通信費	1,298,307	1,204,896	1,159,530	1,093,600	131,052	239,074
支部援助金	1,455,250	1,481,350	1,498,000	1,543,000	1,584,500	1,577,300
教室寄付金	800,000	800,000	800,000	800,000	800,000	800,000
会合費	173,710	228,470	152,978	171,880	159,590	193,312
総会開催費	0	0	0	0	0	0
後援会費	0	0	0	0	0	0
バス旅行開催費	0	0	0	0	0	0
謝金	377,000	413,000	486,500	334,500	322,000	327,000
記念品代	264,813	0	271,845	286,125	197,925	275,100
出張費	78,660	26,960	398,860	39,860	58,860	59,760
振替手数料	108,370	95,045	109,880	139,955	114,750	109,651
慶弔費	85,512	62,960	25,125	76,840	130,530	580
消耗品費	8,816	10,271	22,968	420	13,141	5,650
プログラム作成費	0	0	0	0	0	0
名簿発送手数料	0	0	0	0	0	0
パソコン機器	0	0	0	0	0	0
会費滞納分督促費	73,680	0	0	168,750	0	0
その他	0	0	500,000	0	3,000	0
支出計	8,996,090	8,700,967	9,072,804	8,471,330	8,206,061	7,843,014

	1995年度	1996年度	1997年度	1998年度	1999年度	2000年度
残高	7,398,949	7,029,955	6,732,258	7,586,460	6,991,873	6,730,119

＜ 繰 越 金 内 訳 ＞

	1995年度	1996年度	1997年度	1998年度	1999年度	2000年度
定額貯金	2,800,000	5,800,000	3,800,000	3,800,000	3,800,000	3,800,000
郵便為替	338,831	429,100	0	762,770	483,660	83,750
郵便貯金	2,400,241	385,206	2,141,121	1,640,752	1,850,969	634,774
銀行貯金	1,725,251	262,030	648,407	1,318,471	848,228	1,992,177
現金	134,626	153,619	143,735	64,467	9,016	219,418
合計	7,398,949	7,029,955	6,733,263	7,586,460	6,991,873	6,730,119

2001年度総会報告

2001年5月1日の阪大創立70周年に合わせ、5月5日、6日の両日、大阪国際会議場にて、「地域に生き世界に伸びる—阪大発21世紀」をテーマとした記念イベントが開催されました。記念講演会や国際シンポジウム、さらには手塚治虫展、等が行われ、大学関係者はじめ多くの市民が訪れ成功裏に終わりました。この記念イベントに合わせ、14年ぶりの構築会総会を同所にて5月5日(土)17:30より開催いたしました。

総会では、高原(前)会長の挨拶に続き、事務局より構築会の活動状況と今後の方針の説明、および、会則の改正等を含む役員会議決事項の報告がなされ、出席された会員との意見交換がなされました。

また、総会終了後には懇親会が催され、ご多用な時期にも拘わらず、名誉教授の先生方はじめ、1期生から在校生まで100名を超える会員のご出席をいただき、世代を越えた交流の中、盛況に会を終えることができました。



総会懇親会風景



松尾新会長挨拶



来賓：松井専攻長



来賓：橘専攻長



乾杯：榎木先生



山村新副会長挨拶



会員の皆様には、平素から会の運営と発展にひとかたならぬご支援をたまり、事務局一同心よりお礼申し上げます。さて、構築会の事務活動などに関して以下に報告いたします。

1. 名簿の隔年発行

構築会名簿の発行は、財政面のみならず事務局(特に若手教官)に大きな負担を強いております。そのようなことから、これまでに数年をかけて名簿の発行間隔について検討し、議論を重ねてまいりました。すなわち、

- (a) 1999年秋、学年委員全員に「構築会名簿のありかたに関するアンケート」を実施した。その結果、2年または3年に1度の発行でよいという意見が72%を占めた。
- (b) 2000年度の役員会において前述のアンケート結果が報告され、隔年発行化に向けて引き続き検討することとなった。
- (c) 2001年度の役員会において名簿を隔年に発行することが認められ、会則が改正された。また、その旨が総会に報告された。

以上のような経緯を経た結果、本年度は名簿を発行しない年となりました。多少の不自由を会員の皆様に強いることとなりますが、どうぞご理解いただけますようお願い申し上げます。なお、「構築会だより」は毎年発行し、名簿情報に変更のあった会員や新卒生の名簿情報を併せて掲載することにしましたので、どうぞご利用ください。

2. 財政について

会費滞納者の扱いについても長年の課題でしたが、2000年度の役員会において対処方法が議決されています。すなわち、督促状を2回発送しても会費の納入がない会員には、「会員名簿」および「構築会だより」の発送を停止するというものです。詳しくは2000年度「構築会だより」の役員会報告をご参照ください。

高額滞納者に対する督促は、過去6年の間に2回行われ、本年度に3回目の督促をいたします。したがって前述の対処方法に基づき、本年度から「会員名簿」および「構築会だより」をお送りしない会員も発生いたしました。どうぞご理解いただけますようお願いいたします。なお、6月末日の会費納入状況に基づいて対処いたしました。

3. 総会の開催

2001年5月5日に総会および懇親会を開催し、約110名の会員が集いました。総会では諸事業や会則の改正などについて報告されました。

【2001年度幹事長 多田元英(A80)記】